

令和4年5月15日

# 南の風 446

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

445号の続きです。

スポーツをするということは、生存権や人権といったものとは違った、自らが選ぶべき自由の権利です。やるもやらないも自由であるというのが前提です。

もちろん、すべての人にスポーツをする権利はあります。しかし、それは逆にやらないという自由を含めた権利であり、他者のスポーツをしたいという権利を侵害できるものではありません。不燃性の選手をある程度まで引き上げられたとしても、それ以外の選手たちのモチベーションを犠牲にしているとしたらどうでしょうか。我々指導者は、意欲のある選手たちを守ることも重要な役割だと思えます。

不燃性の選手をその気にさせることができれば、指導者として能力が高く評価されることになります。指導者やコーチは、選手が不燃性だからといって簡単に指導を諦めるわけにはいきません。

しかしながら、チームが成長しないことも簡単に受け入れることはできません。叱られてふてくされるような選手に対してどう指導するか、そこに指導者として人間力が試されています。他者を巻き込むような自己中心的な問題行動には、毅然とした対応が必要になることもあります。ここは、指導者の『指導哲学』が強く反映される部分です。

指導者とは、チームの成長に責任を持つ存在です。それは、個人個人の成長に責任を負うということでありながら、特定の個人だけに囚われてはいけません。

指導哲学の中で、大切なファクターとして『公平と平等』の違いがあります。

公平と平等は似ている言葉ですが、決定的な違いがあります。私はスポーツの世界で大切なのは、平等ではなくて公平だと思っています。

定義するなら、やる気があってもなくても、同じ回数や時間、機会を与えるのが「平等」、やる気などに応じて、与える機会を増減させるのが「公平」です。

例えば、シューティングをするときに、全員が同じ本数、同じ時間だけおこなうのは平等です。しかしチームですから、シューターの役割を担う人がたくさん、長い時間かける方が効率も成果もよくなるはず。 (\*経験が少ない選手や新入部員であれば、同じ本数や時間になることはあります)

一方で、がんばらない人は試合に出さない、がんばっている人は試合に出す。これは平等ではありませんが公平になります。やる気のない選手にも平等に機会を与えるのは、がんばっている人に対して公平ではないからです。スポーツをする権利、スポーツの中のさまざまな権利は、万人が平等に得られる権利ではないのです。

私は、コーチに求められるのは平等ではなく、公平な判断基準を持つことが大切だと思っています。但し、公平さを保つためには、明確な基準が必要になります。この基準があいまいになると、公平さを失うだけでなく不平等感さえも生み出してしまいます。

こういった不平等感は、選手たちの意欲を大きく削ぐことになってしまうので、指導者は細心の注意を払う必要があるのです。